

2026年1月18日 南板橋教会 主日礼拝 降誕節 第4主日 週報番号3499号

説教題：「**復活の見取図**」

聖書箇所：テサロニケの信徒への手紙Ⅰ 4章13-18節

説教者：秀島行雄牧師 招詞：讚美歌93-1-26 交読詩編：詩編119編137-144節（138頁）

讚美歌：83/175（わが心は）/475（あめなるよろこび）/579（主を仰ぎ見れば）/27

「今週の聖句」〔…わたしたちはいつまでも主と共にいることになります。ですから…励まし合いなさい。〕（テサロニケ前書4：17-18）

「牧師室の窓」 「ロシア語の日曜日とは復活日の意味と学びつ空腹癒(いや)す」

「先生の家にて授業賑やかにトロイカ歌い外は粉雪」

(1)皆様おはようございます。本日は2026年1月18日、21世紀の第2四半期が始まっています。日本の和暦で言いますと、昭和の通算では101年になります。皆様にとってこの1年はどのような年でありたいとお考えでしょうか。今日の聖書箇所はその様なご希望に当てはまる聖書箇所であると思います。聖書箇所としては短いですが、内容は豊富、豊かであります。

今日の聖書箇所の始まり13節には「ぜひ次のことを知っておいてほしい」と書かれています。口語訳聖書では「無知でいてもらいたくない」、文語訳聖書では「汝らの知らざるを好まず」と書かれています。何について知っておいて欲しいのでしょうか、何について無知でいて貰いたくないのでしょうか。まるで秘密の扉を開ける様です。それでは、始めに、今日の聖書箇所の中での「気になる言葉」或いは「重要な言葉」を確認しておきましょう。

鉛筆で丸印を付けておくと良いでしょう。始めます。13節では「希望」、14節では「復活」、15節「主の言葉」、16節「キリストに結ばれて」と「復活」、17節「空中」と「主と出会う」と「雲」(雲も重要です)それと「いつまでも主と共にいる」、18節「励まし合いなさい」、以上です。

聖書を読むことは、一種のジグソーパズルを行なう様なもので、カギになる言葉や箇所に着目すると分かり易いですし、的外れにならずに、成程と合点することが出来ます。

私は就職して1年間を札幌で基本的な仕事を叩き込まれました。2年目に転勤させられて、東京の外国業務部に勤務しました。外国の銀行との様々な仕事を短期間で習得し、実務を行なわなければなりません。私が最初に担当した業務は「暗号解読と暗号作成」の仕事でした。「暗号」は英語で、サイファー、或いは、コードと言います。テスト・キーと呼ばれる暗号でした。外国の銀行ごとにテスト・キー暗号の作り方や解読の仕方が異なりますので、英語で書かれた手順書を頭の中に叩き込んで仕事をしました。何が重要かを理解し、的外れにならない様に行ないます。また、日本と欧米とは時差がありますので、早朝出勤当番日には、外国からの大量の通信文を見た瞬間に、キーワードを読み取り、業務別に仕分けをしました。仕事に慣れてくると、キーワードを探し出すというよりは、キーワード自身がここにいるよと叫んでいるのです。どんな仕事でもネジ一本が大切です。どんな料理でも食材の一つ一つに役割があります。

(2)きょうの聖書箇所の主題・テーマは小見出しに「主は来られる」と書かれています。あの十字架で処刑されたイエス様が復活されてこの地上に来られる。それはどの様にしてこられるのかしらということが書かれています。別の言葉で言えば、「主の復活の見取図、構図」が書かれています。「復活の見取図」を別の言葉では、「希望」と言い換えることが出来るでしょう。

きょうの聖書箇所の14節を見てみましょう。〔(4:14)イエスが死んで復活されたと、わたしたちは信じています。神は同じように、イエスを信じて眠りについた人たちをも、イエスと一緒に導き出してください。〕ここで、よく注意してみましょう。

「復活」と言う言葉を聞くと、世間では怪(あや)しい、まやかしてはと思われてしまっていますが、人生はその様に単純ではありません。物事を黒と白、好きと嫌い、善と悪で区分することが分かり易

そうですが、昨今のベネズエラやグリーンランドに関する政治状況の推移を見ても複雑です。国際政治の中で、人類が幾多の試練を経て築き上げてきた「正義」・「人類愛」・「地球環境保全」がここ数年間で無残にも崩れかかっています。この様な状況であればこそ、人類の知恵である宗教が、キリスト教も仏教もイスラム教もユダヤ教も協力して人々に平和と協調を宣べ伝えるその時であると私は思います。「復活」とは、ギリシア語で  $\alpha\nu\alpha\sigma\tau\alpha\sigma\iota\varsigma$ (アナスタシス)復活・甦りと言う意味です。「復活」と言うからには「死」があります。人間は生物ですから死を必ず迎えることとなります。当然のことですが、このことを理解することが難しいのです。

私事ですが、私は昨年の夏に胃の半分を摘出手術しました。進行状況はごく初期の段階でしたが、いずれにしても年齢から逆算すると、残存寿命には限りがあることに直面しました。死に対する恐怖と言うよりは、残存寿命をどの様に使うべき、神から宿題が与えられたと思いました。人生の命に限りがあると気付いた時に、寿命の限界を体験したことで、私は人生を逆に計算するチャンスを与えられました。心の余裕が与えられて、その残存時間を何に使うかを考える機会を与えられたことに気が付きました。まことに感謝です。

テサロニケ教会の人々には、既に亡くなったクリスチャンは主の再臨の時にどうなるのか、復活の恵みに漏れてしまう人がいないだろうかと言う疑問がありました。何故ならば、主の再臨が近づいているという切迫感がクリスチャンたちにあったからです。パウロはテサロニケ教会に人々の不安や疑問を整理し、順序立てて説明し、不安を和らげて行きましたのが、今日の箇所です。

(3) 14節に書かれている「復活」の信仰は13節に書かれている様に「希望」と置き換えることが出来ることを確認してみましょう。パウロは「復活」について、ローマの信徒への手紙6章3節4節で次の様に言っています。

〔ロマ書(6:3)それともあなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスに結ばれるために洗礼を受けたわたしたちが皆、またその死にあずかるために洗礼を受けたことを。(6:4)わたしたちは洗礼によってキリストと共に葬られ、その死にあずかるものとなりました。それは、キリストが御父(おんちち)の栄光によって死者の中から復活させられたように、わたしたちも新しい命に生きるためなのです。〕

ここでは「洗礼」とは何か、「復活」とは何か書かれています。「洗礼」とは「復活」、即ち、「わたしたちも新しい命に生きる」ことでもあります。「洗礼」は通過儀礼でも、受けなくても良いものではありません。私たちの南板橋教会では聖餐式を毎月行なっています。聖餐は「わたしたちも新しい命に生きる」ことを確認しているのです。教会の中には聖餐式を年間で数回のみ限定して行なっている教会もありますが、判断の基準は「わたしたちも新しい命に生きる」ことの確認、即ち、「復活」の「希望」でありますので、人間の社会的生活の基盤に合わせて行なうことが望ましいと考えられます。

続いて、「希望」について考えてみましょう。このことについて、パウロはローマの信徒への手紙6章1節～5節で語っています。先程の箇所の直前の箇所です。余りにも著名な箇所です。お読みします。〔ロマ書(6:1)このように、わたしたちは信仰によって義とされたのだから、わたしたちの主イエス・キリストによって神との間に平和を得ており、(6:2)このキリストのお陰で、今の恵みに信仰によって導き入れられ、神の栄光にあずかる希望を誇りにしています。(6:3)そればかりでなく、苦難をも誇りとします。わたしたちは知っているのです、苦難は忍耐を、(6:4)忍耐は練達を、練達は希望を生むということ。(6:5)希望はわたしたちを欺くことはありません。わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。〕

皆様はこの箇所では何か気が付かれましたでしょうか。それは循環・サイクル形式になっているのです。「苦難」「忍耐」「練達」「希望」が循環しているのです。従って、人生は何度でも、どの様な状

況でも、「苦難」が「希望」へを変えられて、ロマ書6章5節にあるように「神の愛がわたしたちの心に注がれている」ことを私たちは発見するのです。

ここでご参考までに、「苦難」から「忍耐」・「練達」を経て「希望」に至るまでの循環・サイクルですが、パウロと言う人は、目の付け所が職人・技術者ならではの工夫と素晴らしさがあります。

この4つの領域・区域に循環する考え方は、現代経営学の中ではプロダクト・ポートフォリオ・マネジメント(略称PPM)経営理論として知られています。

以前、昨年7月6日の説教で「キリストの愛の広さ、長さ、高さ、深さ」をお話ししました。エペソ書3章18節19節の箇所です。「…キリストの愛の広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解し、人の知識をはるかに超えるこの愛を知るようになり…」パウロは物事を考える時に、「広さ、長さ」の縦横の2次元で考えるだけでなく、「高さ、深さ」の3次元で考えて、「人の知識をはるかに超えるこの(キリストの)愛を知るようになり」と体験しています。物事を頭の中だけで、頭でっかちに理解するのではなく、身体を動かし乍ら、ストレッチ体操をしているパウロの姿を見ることが出来ます。

使徒言行録9章にパウロがクリスチャンを迫害してエルサレムからダマスコに近づいた時に、天からの光がパウロの周りを照らし、彼は倒れました。パウロの回心の場面です。視力を失ったパウロは数日後に「(行伝9:18)目からうろこのようなものが落ち…見えるようになった」と書かれています。私たちの目にも、耳にも鱗(うろこ)の様な物があり、目の判断力、耳の判断力が偏(かたよ)り、機能不十分になってしまいます。要注意です。繰り返しますと、「苦難」が「希望」へを変えられて、「神の愛がわたしたちの心に注がれている」ことを私たちは発見する、自覚するのです。

(4) 15節を見てみましょう。〔(4:15)主の言葉に基づいて次のことを伝えます。主が来られる日まで生き残るわたしたちが、眠りについた人たちより先になることは、決してありません。〕ここに「主の言葉」と書かれています。「言葉」とはギリシア語でλογος ロゴスと言います。「主の言葉」は初代教会でイエスの言葉として大切にされていました。

続いて16節17節です。〔(4:16)すなわち、合図の号令がかかり、大天使の声が聞こえて、神のラッパが鳴り響くと、主御自身が天から降(くだ)って来られます。すると、キリストに結ばれて死んだ人たちが、まず最初に復活し、(4:17)それから、わたしたち生き残っている者が、空中で主と出会うために、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられます。このようにして、わたしたちはいつまでも主と共にいることになります。〕まるで何枚かのスケッチ図か動画を見ているようです。「空中」とは、当時のユダヤ教の考え方の中に、天のある部分と地上との間で霊力・霊の力が働く場と考えられていました。同じ17節に書かれている「雲」とは、旧約聖書では、神の顕現・臨在の象徴です。出エジプト19章にはモーセが稲妻と厚い雲で包まれたシナイ山で、神から十戒を授かる場面があります。また、詩編104編(3節)、イザヤ書19章(1節)には雲は主が乗る車として記されています。18節の「励まし合いなさい」とは、互いに元気づけなさい、互いに慰め合いなさいと言う行動の姿です。クリスチャンが生きようとする力の源泉は、17節に書かれている様に「いつまでも主と共にいる」という確信であり、16節の「キリストに結ばれて」主と共に天の国に生きるという確信であります。この様に読んで参りますと「復活の見取図」が身近になって参ります。21世紀の第2四半期の始まりに、私たちも「復活の見取図」を見ながら、「信仰の人生の見取図」を描いてみては如何でしょうか。

(5) 最後にご参考になればと申し上げます。先週の1月14日に宮中での歌会始が行なわれました。素晴らしい歌の数々に魅せられました。新春に行なわれる宮中歌会始を楽しみにしています。今年の民間からの入選10人の中に、78歳の方、長く学校の教員を勤められた方の努力と挫折と希望の歌がありました。不登校の生徒の家を幾度も訪ねて、不登校の生徒はその度に「明日は行く」

と答えるのです。翌日の学校での授業ではその子の席は空いたまま、そして授業は終わります。その繰り返し、その先生の心の中は如何許りでありましたでしょうか。

…私の想像ですが、幾度も挫折をしながら、でもこの方は諦めなかったのです。私は瞼の裏が熱くなりました。その歌をお伝えして終わります。

京都府 中川文和さんの歌

「訪ふたびに 明日は行くと言ひし子の 席空きしまま 授業終へたり」 ありがとうございます。

・・・お祈りします。イエス・キリストの主なる神様。

私たちはあなたの御恵みによって生かされていることに感謝いたします。主イエス・キリストのお誕生を迎えました。加えて、新しい年を迎えて第3回目の主日礼拝を迎えました。これからの1年間の日々の御守りに感謝いたします。

人生の安らかな時にも辛い日々にも、あなたに向かって祈ることが出来ます様にお支え下さい。神が創造されましたこの地球上に生きる一人一人に平安・平和・希望が与えられますように。食べ物が乏しい人々に、災害や戦争の只中にある一人一人に慰めがありますように、お守りください。私たちに知恵と勇気をお与え下さい。…教会に連なる一人ひとりに、地域で生活している一人ひとりに、主なる神の御恵みと平安がありますように。

イエス・キリストの御名によって祈ります。 アーメン